

## 台湾の「新移民」のいま ——台湾中・南部のフィールドから

神宮寺 航一

### 一 はじめに

本稿は、2023年9月に海域アジア・オセアニア研究プロジェクト経費で実施した、台湾中・南部への訪問の成果によるものである<sup>1</sup>。本稿の目的は、台湾における東南アジア出身の「新移民」に関する2022年の状況を報告することにある。新移民は「新住民」とも呼ばれ、台湾人との国際結婚を機に台湾に定住した人々を指し、現在の台湾社会では原住民、閩南人、客家、外省人の四大族群（注：族群=ethnic groupの中国語訳）に次ぐ第5のエスニックグループとして数えられている〔横田 2016〕。なかでも近年の台湾社会で特に存在感を増しているのは東南アジア出身の住民である。彼らの人口は、新住民が15万人、労働移民が70万人であり、これに新移民の第二世代を加えると、約56万人とされる原住民の総人口よりもはるかに人口が多いとされる〔玉置 2020〕。

台湾における国際結婚のブームは1980年初頭に始まった。1990年代後半から2000年代前半にピークを迎え、2003年には結婚件数全体の27.9%が国際結婚であった〔横田 2016 : 144〕。一方で、2000年代半ばまでは「処女保証」「花嫁が逃げたらもう1人娶れます」といった謳い文句の国際結婚斡旋の広告が公然と存在したことに代表されるように、国際結婚ブームを後押しした仲介システム自体が女性の商品化や人身売買の温床となっていたとして、マスメディアから厳しく非難された〔横田 2016 : 144〕。

また、台湾の新移民を検討するにあたって重要なテーマの一つが、前述の台湾の族群の一つである客家の世界に広がるネットワークである。客家は中国南部を始めとして世界各地に分布する漢族の支系の一つであり、台湾においても人口の約15%を占める一大集団とな

---

<sup>1</sup> 2023年9月5日から12日にかけて、河合洋尚、横田浩一、奈良雅史（台中市における調査のみ）、田井みのり、神宮寺航一、渡邊泰輔、田村あすかの7人で、台中市中心部および同市石岡区、東勢区、ならびに高雄市美濃区、屏東県佳冬郷を訪問した。

っている [飯島・河合・小林 2019]。横田 [2021] によると、東南アジア系の女性配偶者の中でのインドネシア女性の割合は全国平均では約 2 割だが、新竹県では約 5 割、苗栗県では約 4 割と、その割合が非常に高くなっている。これは客家の多い地域では、花嫁として西カリマンタン州出身の客家系の華人が多く選ばれていることと関係しているのだという [横田 2021 : 64]。

本稿ではまず、第二節で台中の市中心部、とりわけ「台中のリトル東南アジア（台中小東南亜）」として近年注目を集めている「東協広場」[呉 2022 : 25-26] とその周辺の新移民の状況に焦点を当て報告する。そして第三節・第四節で、客家人口が多いことで知られている高雄市美濃区、屏東県佳冬郷におけるインタビューで得られた、近年の新移民をめぐる情報を報告していくことにしたい。

## 二 台中駅付近の「小東南亜」

台湾中部の経済の中心地である台中市は古くから移民を多く受け入れ、郊外の客家地域においての国際結婚も非常に盛んであった [横田 2021]。現在では多国籍企業の工場が林立し、台中市は台湾を代表する国際都市の一つとなった。筆者が宿泊した市中心部のホテル近隣の銀行には、インドネシア語で「インドネシアに送金できます」の横断幕が掲げられていた (写真 1)。また台湾高速鉄道・台中駅のトイレには、ムスリム用の礼拝室があった。その隣の多目的トイレにはムスリムフレンドリートイレの表示があり、中には折りたたみ式の椅子とともに、礼拝前に手足を洗うムスリムのために設置されたと思われるシャワーがあった (写真 2)。駅のトイレにおけるこのような設備は、東京や大阪といった日本の大都市では見たことがない。



写真 1 インドネシア語が併記された銀行の横断幕 (2022 年 9 月 5 日、筆者撮影)



**写真 2** 駅多目的トイレのシャワー設備

(2022年9月6日、筆者撮影)

台中市の中心駅である台中駅のすぐ近くに、東南アジア系の物販店舗が集まり、移民たちのたまり場となっている「東協広場 ASEAN SQUARE」というビルがある。呉 [2022] によると、東協広場は 1978 年に火災で焼失した市場の跡地に、1991 年「第一広場」という名の複合商業施設として完成した。2000 年以降に台湾中部広域から東南アジア出身の外国人労働者が休日に集まるようになり始め、ビルやその周辺エリアに外国人労働者を対象とした店舗・商店が増えた。そして、2016 年には現在の「東協広場」と改名され、現在では東南アジア系のエスニックタウンとして認知されているのだという [呉 2022 : 25-26]。

2022 年 9 月 9 日午前、太陽の照り返しが厳しく非常に暑い中、筆者は東協広場へ向かい、データ収集を行った。台中駅バスターミナルの次の停留所である最寄りのバス停の名前は、まだ「第一広場」のままであった。午前 9 時過ぎ、ビルの入口のシャッターは閉じられており、まだ内部に入ることはできなかったが、ビル前のエリアにはさとうきびジュースやバインミー（ベトナム風サンドイッチ）を売る屋台が既に商売を始めており、屋台近くに並んだテーブルの椅子には客が既にちらほらと座り始めていた（写真 3）。台湾でいう東南アジア系移民のたまり場という点、横田 [2016 : 142] の報告にも見られる台北

駅の1階ロビーのような、床にシートを敷き、持ち込みのお弁当を食べながらのお喋りを想像していたが、ここでは屋台が中心となってたまり場が形成されているようであった。



**写真3 東協広場前のベトナム屋台**

(2022年9月9日、筆者撮影)

筆者は、試しに屋台でさとうきびジュースを買ってみた。店主より、中にライムを入れるか聞かれた。筆者が「要ります」と話すと、店主は「入れるのが好きな人も、嫌いな人もいるから、いつも最初に聞くんだ」と、少しベトナム語の訛りがある中国語で話した。続けて筆者が「あなたはベトナム人？」と聞くと、店主は「そうだよ」と答えたので、「私は日本から来たんですよ」と返すも、残念ながら筆者の中国語は通じていないようであった。屋台の客は、皆ベトナム語で会話していた。

東協広場の周辺を一周すると、ビル1階の道路に面している店舗は既に開店していた。東南アジア、特にベトナム系の雑貨を売る店が多く、看板もベトナム語表記が多かった(写真4)。ビル入口付近には中国語で書かれた商店、安宿や漫画喫茶などの看板があり(写真5)、ベトナム語で広告を出すナイトクラブの存在も確認できた。また、1階正面入口の近くには中国寺院も存在していた(写真6)。全体としてベトナム語で会話する店主・客が非常に多く、またベトナム人向けと思われる両替店や携帯SIMカードの販売店も多くあったことから、現在の東協広場は新移民の生活の場としてだけでなく、主にベトナム系の短期滞在の労働移民の憩いの場としても機能していると考えられる。



写真4 広場1階外周の商店

(2022年9月9日、筆者撮影)



写真5 1階エントランス 中国語で書かれた看板

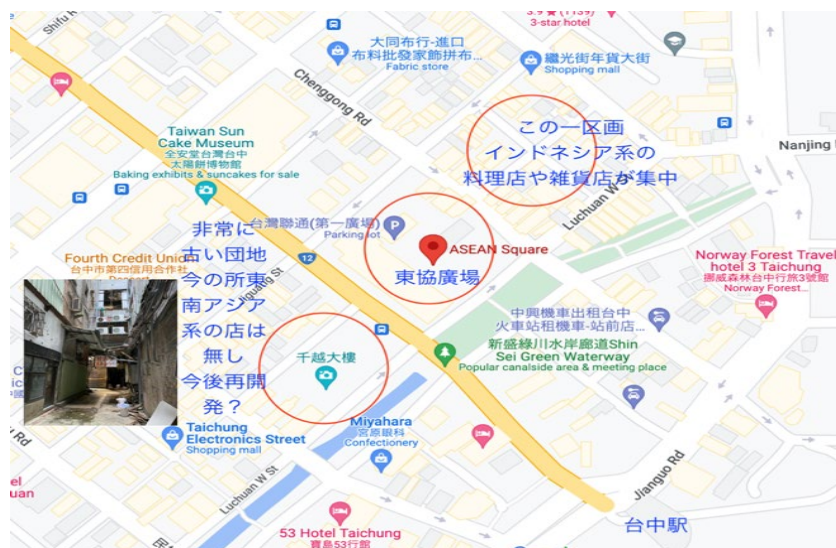
(2022年9月9日、筆者撮影)



写真6 1階の中国廟

(2022年9月9日、筆者撮影)

一方で、東協広場の東側には、インドネシア語で書かれた看板が集中するエリアが存在した(地図1)。こちらはインドネシア人向けと思われる雑貨店や両替店、SIMカード販売店の他、インドネシア料理のレストランが集中していた(写真7)。



地図1 東協広場付近の地図、右下の台中駅から東協広場まで200メートル程度

(Google map より筆者が加工)



**写真7** SIMカード販売店を兼ねたインドネシア料理店  
(2022年9月9日、筆者撮影)

このエリアにある店のメニューを見ると、インドネシアの中華系のレストランでよく見かける bakso goreng (魚の揚げ団子) や pan tiao goreng (炒めライスヌードル) の文字が確認できた (写真 8)。近隣にもインドネシアの中華料理を提供する店が多く、これらの店舗は新移民、もしくはインドネシアからの帰国華僑が経営している可能性が高いと考えられる。先に述べたようにインドネシア人の新移民の中には西カリマンタンの客家系華人も多いので、このエリアのコミュニティには客家ネットワークが多少なりとも関係している可能性もある。一方で、インドネシア本国で人気のパダン料理店や、インドネシア語のみで「昔の恋人の思い出は忘れても『思い出カフェ』は忘れるな」とユーモアに溢れた文章が書かれた看板も見られるなど、短期滞在のインドネシア人向けと考えられる店舗も多く存在していた (写真 9)。



写真8 レストランのメニュー  
(2022年9月9日、筆者撮影)



写真9 (左)パダン料理店 (右)「思い出カフェ」  
(2022年9月9日、筆者撮影)



台中市政府観光旅遊局のウェブサイト<sup>2</sup>における記述によると、以前はこのエリアも焼失した市場の一部であったという。第一広場が建設される際、このエリアはビルの敷地とはならず、現在まで古い街並みを残したままである。旅遊局は街のレトロさを活かした観光開発を目指しているようであった。日本の旅行ウェブサイト『台北ナビ』<sup>3</sup>によると、このエリアには2000年頃からインドネシア人相手の店舗が増え始めたのだという。

旅遊局のウェブサイトでは、東協広場を「台中のリトル東南アジア」と呼ばれる観光地<sup>4</sup>、として取り上げているが、その東側のエリアに暮らすインドネシア人の多さに言及されていなかった。一方で、東側のエリアの街灯には「東協広場 ASEAN SQUARE」の文字が掲げられており、東協広場とここを一体化してエスニックタウンとして売り出そうとしているアクターの存在が垣間見える。

このエリアにおける新移民や帰国華僑、そして客家に関する先行研究は、筆者が調べた限り見当たらなかった。このエリアに実際にはどのようなコミュニティが存在するのか、またどのようなアクターがここをエスニックタウンとして売り出そうとしているのかについては、今後の検討課題としたい。

また、東協広場の西側には非常に古い団地が存在し、現在は住人の退去も進み、再開発を待っているという雰囲気であった。現在のところ、広場西側に東南アジアと関連する店舗などを見つけることはできなかったが、再開発を行うのであれば、台中市の東南アジア系移民の増加に合わせてここが「エスニックタウン」に組み入れられるのかどうか、台湾のエスニックタウン研究においても注目すべき事例となり得るだろう。

### 三 美濃における東南アジアからの新移民

客家人口の多い高雄市美濃区には、多くの新移民が存在することが知られている。1990年代に行われた研究によると、美濃の基幹産業であったタバコ製造の衰退により、若年男性の伴侶探しが非常に困難となった結果、美濃では多くの外国人花嫁を受け入れ始めた〔夏

---

<sup>2</sup> 「成功路青草街」『臺中観光旅遊網』<https://travel.taichung.gov.tw/zh-tw/Attractions/Intro/378/> (2023年3月18日最終閲覧)。

<sup>3</sup> 「エリアを歩こう・中部編～台中火車站周辺～」『台北ナビ』<https://www.taipeinavi.com/special/5027704> (2023年3月18日最終閲覧)。

<sup>4</sup> 「東協廣場」『臺中観光旅遊網』<https://travel.taichung.gov.tw/zh-tw/attractions/intro/73> (2023年3月18日最終閲覧)。

2018 : 61-62]。美濃における国際結婚で特筆すべき点は、それが現地の伝統的なネットワークに根ざして行われていたということである。夏によると、美濃では客家の外国人花嫁が好まれ、仲人となる者の家で、美濃の男性たちは常に花嫁候補の最新情報を交換していた。花嫁の來台後にも仲人は夫婦の相談役となるなど、美濃における国際結婚は、他地域で見られるような広告による花嫁募集というよりはむしろ、客家の国際ネットワークや美濃における既存の人間関係が基礎となったものであった [夏 2018 : 62-63]。

美濃における新移民の現況を調べるため、筆者は 2022 年 9 月 10 日午後、地元の名士である A 氏より美濃区内にて聞き取りを行った。聞き取りを行ったカフェは日本統治時代の警察署を改装した日本風家屋（写真 10）で、室内には日本の現代美術家の作品が多く飾られており（写真 11）、ここからも台湾の多元文化が感じられた。以下の記述内容は A 氏からの聞き取りに基づく。



**写真 10** 日本統治時代の警察署を改装したカフェ

(2022 年 9 月 10 日、筆者撮影)



**写真 11** 室内に飾られる日本作家の作品

(2022年9月10日、筆者撮影)

1995年、美濃の龍肚小学校に、台湾初の外国人花嫁の中国語クラスが誕生した。近年は無くなったが、一時期、中国語クラスの履修証明がないと台湾の身分証を得られない政策が施行されていた時期があったためだという。約15年から20年前に、美濃では外国人花嫁の来台の最盛期を迎え、その頃は小学校の3分の1は外国ルーツの児童だった。一方で、近年は外国ルーツの児童は減少傾向にある。

現在の美濃の新移民の国籍としては、第一にベトナム、次いでインドネシアが多い。1980年代、国際結婚ブームの初期はインドネシア人が多く、やはり客家系華人が多かった。その後ベトナム人が多くなり、その頃にはカンボジア人の新移民も美濃に来ていた。彼女らは「外配」と呼ばれたが、1990年代後半には「陸配」と呼ばれる中国人が多くなった。しかし、2000年代からは中国の経済発展に伴って中国人の新移民も減っていったという。

これらの新移民への中国語クラス提供などの生活補助サービスについては、当初は行政やNPOなどが担っていたが、「外国人花嫁が未だに差別され続けている」ということで、新移民は自分たちで「南洋台湾姉妹会」という団体を作って相互扶助を始めた。南洋台湾姉妹会は現在では台湾全国で活動を行っているが、元々は美濃で成立したものだという。

A氏は、近年の新移民をめぐる諸問題についても話して下さった。近年来台したベトナム系の新移民は、その多くが外食店を開くなどして生計を立てているが、中には性風俗店を開いているケースもあるのだという。美濃の一部の新移民は、工場で働く在台ベトナム人労働者の男性と、ベトナムに住む若い女性を偽装結婚させ、男性には月数千元を渡す。これは「低収入の工場労働者にとってはいい稼ぎ」なのだという。そして、合法的に台湾に滞在できる身分を得た女性を來台させ、新移民の店で売春させるのだといい、これは約10年から15年前に美濃における大きな社会問題となった。

ここまでがA氏からの聞き取りの内容である。先行研究では、タバコ産業の衰退によって壊滅的な被害を受けた美濃の社会的ネットワークが、国際結婚に関わる一連のアクターや実践を起点として部分的に復活したことが指摘されているように[夏 2018]、美濃における国際結婚は現地ネットワークに深く根ざして行われている。これは、新移民の相互扶助団体が美濃を発祥として誕生したこととも無関係ではないだろう。一方で、聞き取りからは新移民による偽装結婚が近年になって社会問題化したことも示唆されており、美濃と新移民の関係性を論じるにあたって、伝統的なネットワークに根ざした国際結婚という従来のモデルが現代にも適用できるのかに関して、更なる検討を進めていく必要があると考えられる。

#### 四 客家の伝統食文化を継承する佳冬郷のベトナム系新移民

9月11日午後、筆者は同じく客家人口の多い屏東県佳冬郷を訪れた。このとき、佳冬郷で惣菜店を営むB氏にインタビューを行った。B氏はベトナム・ホーチミン市出身で、23年前に佳冬郷に来た新移民である。B氏の惣菜店には大きな厨房や冷蔵庫があり、屋外には大きな竈や鍋があった。B氏は中国語に非常に堪能で、筆者は自己紹介を受けるまで彼女を台湾出身だと思っていた。また、同時に店内でテイクアウトの料理を待っていた、店の常連客であるという客家のC氏にも聞き取りを行った。

B氏によると、佳冬郷には非常にベトナム人が多く、インドネシア人の住民も少なくないという。ベトナム人の大規模なコミュニティもあるが、B氏はそれほど参与していない。一方で、B氏のベトナム人の友達との付き合いは盛んであるという。佳冬郷は小さな町であるが、東南アジアの雑貨や食料品を売る店が複数あり、日常生活には不便はない。佳冬郷のベトナム人住民の特徴として、新移民の女性だけでなく労働移民である男性も多いことが挙

げられる。男性たちは、近隣の町にいくつか存在する規模の大きな工場で働いているのだという。筆者が調べた限りでは、佳冬郷の付近には大企業が所有する大規模工場は存在しなかったことから、中小企業に受け入れられた労働移民が、佳冬郷のベトナム人男性住人の多くを占めているものと考えられる。

B氏と普段から仲が良いというC氏によると、B氏は台湾人との国際結婚によって佳冬郷に来た新移民であるという。同様に來台した新移民のベトナム人女性が、佳冬郷内には非常に多い。B氏は中国語だけでなく客家語のレベルも相当なもので、C氏とは普段客家語で会話している。C氏はB氏について「すごく働き者で、食べたい料理を頼めば客家料理でも何でも作ってくれる」と評していた。また、屋外の大きな竈を使い、客家のお菓子も作ることができるとのことだった。この日は中秋節の翌日であったが、中秋節の前日にはB氏が作った紅龜粿という伝統的な客家のお菓子が、店のテーブルの上にたくさん並んでいたのだという。

## 五 おわりに

今回の訪問では、台湾到着後4日間の隔離期間があり、長期間のホテル生活に疲れ果てた筆者は、隔離明けの夜に台中駅の周辺を散歩した。台中駅は現在高架駅となっており、以前使用されていた日本占領時代の駅舎は文化遺産として保存されている(写真12)。台湾文化の多元性を体感したと同時に、台中駅の周辺でも多く見かける東南アジアからの移民は「多元文化」の一員として認識されているのか、という疑問が筆者の頭をよぎった。



写真12 台中駅旧駅舎

(2022年9月5日、筆者撮影)

本稿の報告でも明らかなように、東南アジアからの新移民は、現代台湾社会において様々な側面から存在感のあるアクターであることは疑う余地がない。台中の市中心部には東南アジア系の移民が集まるビルがそびえ立ち、新移民や外国人労働者のコミュニティのための広場として機能していた。また、婚姻、そしてそれに伴う外国ルーツの児童の増加という側面を見ても、美濃の学校における全児童の3分の1が外国ルーツであった時期があることから、新移民やその子どもたちの実践が現地の習俗に多少なりとも影響を与えた可能性もあるだろう。併せて、客家の多い地域では客家系華人との結婚が多かったことから、新移民の存在が台湾国内外を跨ぐ客家のネットワーク形成の一翼を担ったことも想像に難くない。さらに、東南アジアの新移民は自ら飲食店を始めることも多く、台湾の食文化にも何らかの影響を与えているのではないかと考えられる。実際に、インタビューを行った佳冬郷の新移民は、現地の客家住民の口に合う料理を振る舞うだけでなく、儀礼用の伝統的な菓子をも作って売っており、客家の伝統的食文化を継承する上でも大きな役割を背負っていた。

今回の訪問では、現地の方々から様々な局面で「多元文化」という単語を聞いた。台湾政府からは「アジア太平洋の多元的な台湾」[玉置 2020: 31]という国家像に言及される際に用いられることの多い「多元文化」という表現であるが、フィールドのレベルでは、台湾や台湾客家の文化は、ポルトガル、オランダ、鄭成功、清、日本、中国国民党という様々な支配者が持ち込んだものの複合体であり、多元的なものである、ということを説明される際に用いられていたという印象を受けた。今回の訪問の結果からは、台湾では今後、新移民たちが「多元文化」の重要な担い手となる可能性が高いことが示されているといえる。

最後に、訪問の最終日である2022年9月12日、筆者が訪れた六堆客家文化園區の展示に触れて本稿を終えたい。文化園區には、「外国人の目に映る六堆」と題する展示があり、日本人やアメリカ人の研究者による客家研究への貢献が記されており、筆者は台湾の客家がいかに国際的な視点から研究されているかを再確認した。今回の訪問で得られたデータを踏まえると、次回この文化園に来訪した際には、客家文化の継承を実質的に担っている新移民たちの目に映る六堆に関する記述が「外国人の目に映る六堆」の展示に加えられているかもしれないのではないだろうか。

## 謝辞

今回の訪問では、客家委員会・客家文化発展センターの方々、協力者の方々、そしてインフォーマントの方々には大変お世話になりました。コロナ禍の中での訪問が成功し、貴重なデータが得られたことは、ひとえに皆様のご尽力とご協力があったからこそです。この場を借りて深くお礼申し上げます。また本稿の執筆の過程では、東京都立大学の横田浩一先生に、台湾研究の専門家の視点から非常に多くの有意義なコメントを頂きました。ここにしてお礼申し上げます。

## 参考文献

- 飯島典子・河合洋尚・小林宏至 2019『客家——歴史・文化・イメージ』東京：現代書籍。
- 夏 曉鵬 2018『「外国人嫁」の台湾——グローバリゼーションに向き合う女性と男性』（前野清太郎訳）、東京：東方書店（夏曉鵬 2002『流離尋岸——資本国際化下の「外籍新娘」現象』台北：唐山出版社）。
- 呉 素汝 2022「台湾在住外国人に向けた多言語表示——台中東協廣場の調査から」『言語文化共同研究プロジェクト』2021：23-32。
- 玉置充子 2020「台湾の対東南アジア関係の進展と社会の多元化」『拓殖大学台湾研究』4：29-57。
- 横田祥子 2016「東南アジア系台湾人の誕生——五大エスニックグループ時代の台湾人像」陳來幸・北波道子・岡野翔太編『交錯する台湾認識——見え隠れする「国家」と「人びと」』pp. 142-153、東京：勉誠出版。
- 2021『家族を生み出す——台湾をめぐる国際結婚の民族誌』横浜：春風社。

(じんぐうじ・こういち 東京都立大学大学院)